

〈研究ノート〉

東京にあった初期のホテル

— 鷗外作品の舞台として —

川崎 晴朗

Ogai Mori and Early Hotels in Tokyo

Seiro KAWASAKI

はしがき

筆者は一九八〇年代なかばから築地居留地（一八六八—一八九九年、現在の中央区明石町にあった。）の研究を行ってきた。その過程で東京の初期のホテルについて関心を持ち、さらに森林太郎（鷗外）がそのいくつかに関係をもったことを知った。本稿は筆者の居留地研究のいわば副産物である。

森鷗外は、一九〇九年（明治四十二年）に発表した『追憶』で、「宴会は沢山ある。二箇所を断つて一箇所に行くといふやうな日もある。併しいつも行く所は極まつてゐる。偕行社、富士見軒、八百勘、湖月、帝国ホテル、精養軒杯といふ所である。」と述べた。

一九〇九年といえば、彼は陸軍軍医総監・陸軍省医務局長であり、また翻訳に創作に、文学活動を多方面に展開しつつあった。社会的にも多忙であったことが想像される。ホテルもよく利用した。これは右の引用文から明らかであるが、彼の場合はもちろん宿泊のためではなく、ホテルの宴会場や食堂に招かれ、または招いたのである。

鷗外は一九一七年（大正六年）十二月二十五日、宮内省帝室博物館総長兼図書頭ずしょのかみとなり、一九二二年（大正十一年）に他界するまでその職にあった。彼の社交活動はさらにその幅をひろげたことであろう。

筆者は、東京にあったホテルがしばしば鷗外作品の舞台となっていることに着目して本稿を起草した。鷗外研究者、また広く一

般の方々の御参考になれば幸いです。なお、筆者が學燈社『國文學』の一九九九年八月号に寄せた「築地精養軒とその光景—森鷗外『普請中』にふれて—」をあわせて参照されたい。

※ ※ ※

付表は、一九一五年（大正四年）末までに東京で開業したホテルを示すため筆者が作成したものである（注1）。

この表は、一般に開放されたホテルのみ掲げた。例えば、出島のオランダ商館の館長一行は、一六四一年ごろからは江戸参府の際は日本橋石町三丁目北側の長崎屋を定宿としていたという。詳細は坂内誠一『江戸のオランダ人定宿 長崎屋物語』（流通経済大学出版会、一九九八年）などを参照して頂きたいのであるが、長崎屋が特定の人達のための施設であって一般向けでなかったことは明白であるため付表からは除いた。

鷗外という偕行社は一八七七年（明治十年）創立で、陸軍将校のための親睦を増進し、相互扶助をはかる団体で、九段に本館があった。宿泊も可能であったが、やはりホテルとはいえない。偕行社は全国各地に集会所があり、ここでも宿泊ができた。鷗外も、例えば一九一四年（大正三年）五月、旭川を訪れたとき、同地の偕行社に宿泊したようである。

ともあれ、付表で明らかのように、東京では築地居留地（現在の中央区明石町）とその周辺に最初期の一般向けホテルがつけられた。その後、日比谷、上野、芝などにもホテルが開業するようになったことが分かる。なお、『追儺』にいう湖月については、斉藤月峯著『武江年表』の一八七三年（明治六年）の項に説明があるので参照されたい。東洋文庫に収められている金子光晴校訂の『増訂 武江年表 2』（平凡社、一九六八年）では二五五頁である。

また、帝国ホテルについては、鷗外が利用したのは渡辺讓の設計により一八九〇年（明治二十三年）十一月に落成した第一世代の建物で、帝国ホテル編・刊『帝国ホテル百年史』に階上・階下の平面図が載っている。これを付図1として再録させて頂く。

1 築地精養軒と東京ホテル

付表から、一八八八年（明治二十一年）、鷗外を追ってドイツ女性が来日した当時、東京には、洋風の宿泊施設としては築地精養軒と日比谷見付の東京ホテルしかなかったことが明白となるであろう。その二年後、築地居留地にクラブ・ホテルができるが、会員制であったので、たとえ彼女がそのころになって来日したと仮定しても宿泊はできなかった筈である（注2）。

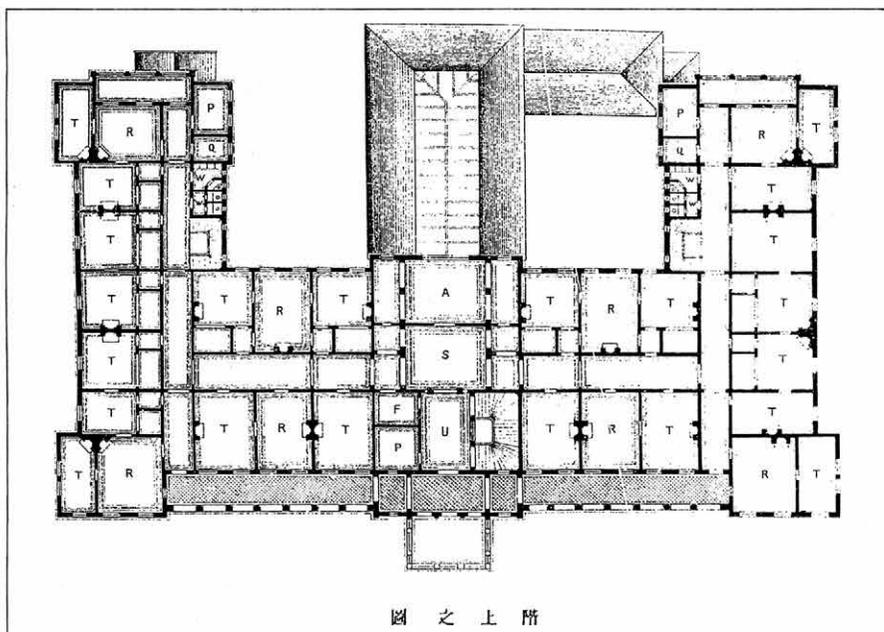
それでは、小金井良精など鷗外の関係者は何故、東京ホテルでなく築地精養軒を選び、彼女を宿泊させたのか。築地は横浜へ通じる鉄道の終着駅・新橋に近かったが、日比谷も新橋からあまり離れていない。

偶然であるが、同じ一八八八年、フィリピンから独立の志士ホセ・リサル（Dr. José Rizal y Alonso、一八六一—一九六年）が来日、東京ホテルに宿泊している。具体的には三月一日から七日までのことであるが、彼はウィーンにいる友人、ブルメントリット（Dr. Ferdinand Blumentritt）にあつて三月十四日付で書簡を送り、次のように言っている。

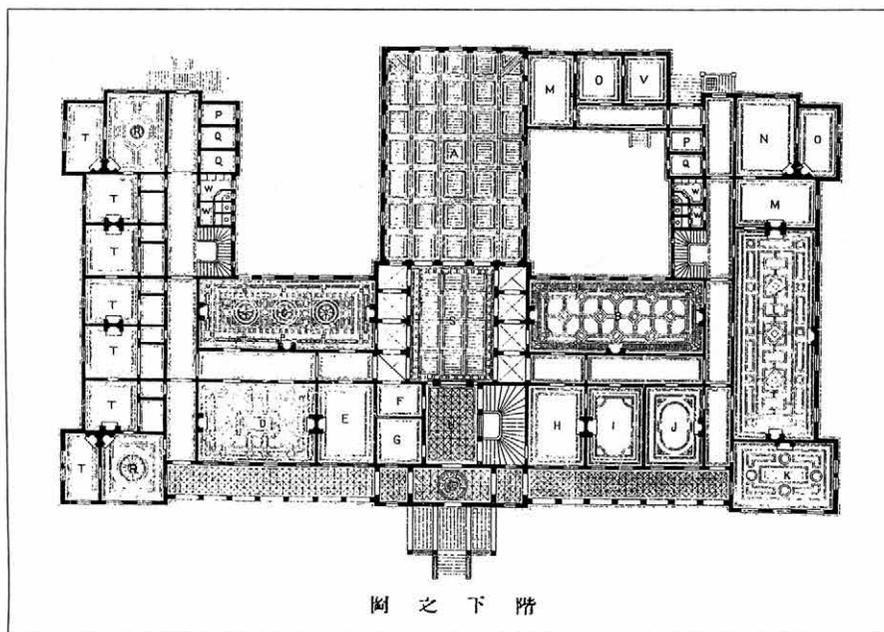
Das Hotel wo ich wohnte war sehr un bequem, und deshalb bin ich hier in der spanischen Gesandtschaft umgezogen.

付表 東京にあった初期のホテル（1915年までに開業したホテル。○印は築地外国人居留地の域内にあった。）
（川崎晴朗・作成）

ホテル名 (カッコ内は英・仏語名)	アドレス	開業	閉業
築地ホテル館 (Yedo Hotel)	軍艦操練所跡	1868年8月16日（慶応4年6月28日）、部分的に開業	1871年12月31日（明治4年11月20日）休業、その後焼失
○オテル・デ・コロニー (Hôtel des Colonies)	南小田原町三丁目、のち居留地18番	1869年2月または3月	1872年4月3日（明治5年3月26日）焼失
○江戸ホテル (Yedo Hotel)	相对借地域、のち居留地17番A	1872年後半	1879年（明治12年）1月19日焼失
○オテル・デ・コロニー(再建)	新栄町五丁目6-8番地、のち居留地18番	1873年（明治6年）後半	1878年（明治11年）
○オテル・デュ・グラン・ヴァテル (Hôtel du Grand Vatel)	新栄町五丁目3番地	1874年（明治7年）ごろ	1875年（明治8年）ごろ
○東京ホテル (Tokyo Hotel)	居留地33番A	1874年	1882年（明治15年）初頭
築地精養軒ホテル (Tsukiji Seiyoken Hotel)	采女町32、33番地	1876年（明治9年）6月	1923年（大正12年）9月1日
東京ホテル (Tokyo Hotel)	日比谷門見付（麹町区有楽町三丁目2番地）	1887年（明治20年）6月23日	1899年（明治32年）3月以前
○クラブ・ホテル (Club Hotel)	居留地1番	1890年（明治23年）5月	1892年（明治25年）または1893年（明治26年）
帝国ホテル (Imperial Hotel)	麹町区内山下町一丁目1番地	1890年11月3日	（現在も営業）
○ホテル・メトロポール (Hotel Metropole)	居留地1番（明石町1番地）	1892年（明治25年）または1893年（明治26年）	1909年（明治42年）7月
○オテル・セントラル (Hôtel Central)	明石町32番地、のち明石町12番地	1901年（明治34年）	1920年（大正9年）末ごろ
上野精養軒ホテル (Uyeno Seiyoken Hotel)	上野公園	1902年（明治35年）	1917年（大正6年）10月1日
ホテル愛宕館 (Hotel Atago-kan)、のち東京ホテル (Tokyo Hotel)	芝区愛宕山	1902年ごろ	1914年（大正3年）ごろ
望翠楼ホテル (Villa Belvedere、のちBosui-ro Hotel)	大森新井宿	1912年（明治45年）6月	1931年（昭和6年）または1932年（昭和7年）
日比谷ホテル (Hibiya Hotel)、のち東京ホテル (Tokyo Hotel)	麹町区有楽町一丁目3番地	1912年（大正元年）12月以前	1919年（大正8年）ごろ
東京ステーションホテル (Tokyo Station Hotel)	東京駅構内	1915年（大正4年）11月2日	（現在も営業）



階上之図



階下之図

渡辺謙の設計による帝国ホテル平面図

提供：日本建築学会

- A：踏舞室(奏樂室) B：朝飯室 C：転球室 D：談話室 E：荷物置所 F：帽衣置所
 G：玄関番詰所 H, I：事務室 J：喫煙室 K：新聞縦覧所 L：臨時会食室 M：配膳室
 N：厨房 O：血置所 P：給仕人詰所 Q：浴室 R：客室 S：広間 T：寢室 U：階段の間
 V：血洗所 W：便所 (Aのカッコ内は「階上」、それ以外は階上・階下とも同じ)

付図1 帝国ホテル(階上・階下)

(出典) 帝国ホテル編・刊『帝国ホテル百年史』(1990年)、64頁。

訳せば、「私がいたホテルは非常に不愉快で、そこで私はここ、スペイン公使館に移転いたしました。」ということになる(注3)。これで、築地の精養軒の方が東京ホテルより居心地がよかつたらしいことが分かる。もともと精養軒はレストランとして出発し、ホテル棟は同じ敷地内に増築された。ヨーロッパから来た独身女性にとり、何かと便利であったと思われる。

2 ホテル愛宕館

鷗外の『普請中』は、渡邊參事官が会食した西洋婦人がコジンスキイというポーランド人と愛宕山に泊っているという設定になっている。

鷗外の日記によると、彼は一九一〇年(明治四十三年)三月三十一日、Jollyというイギリス人に招かれ、「愛宕山の上なる東京ホテル」で夕食を共にしている。鷗外はこの経験を生かして、『普請中』に登場する婦人が愛宕山に宿泊していたという設定で小説化したのではないかと思う。

ホテル愛宕館は一九〇二年(明治三十五年)ごろ開業し、一九〇四年(明治三十七年)ごろ「東京ホテル」と改称した。

愛宕山は芝区(現在の港区の一部)にあったが、東京都港区立三田図書館編・刊『明治の港区』(一九六七年)によると、一八八九年(明治二十二年)十二月、ここに愛宕館と愛宕塔が建てられた。愛宕館については、「淡い黄色の番歴青^{べんき}もて、塗りたる二層楼にして、(中略)西洋料理店を開き、眺望の絶佳なるに因り、傍ら会食に使用したるも、其後廃業して、(後略)」とある(二三四頁)。

明治時代、東陽堂は『風俗画報』の臨時増刊として相当数の『東

京名所圖會』を刊行した。戦後、宮尾しげを監修で復刻されたが(陸書房)、これによると、一八八六年(明治十九年)四月に愛宕公園(または愛宕山公園)が設立された。面積は四、七九三坪であった(『芝区之部』(一九七二年)、一八〇頁)。愛宕館と愛宕塔はここに建設されたのである。

東京都編・刊『東京市史稿 市街篇』、第七八に「愛宕山公園内愛宕塔之圖」が載っているので、付図2として掲げる(注4)。

『明治の港区』は、愛宕館にホテルの施設があったといっていない。しかし、横浜のジャパン・ガゼット社が毎年刊行していた『The Japan Directory of《Hotels in Japan》』の項を見ると、一九〇三年版にはじめてホテル愛宕館(Hotel Atago-kan)が掲げられている(三九二頁)。おそらく、一九〇二年(明治三十五年)ごろ愛宕館の二階を改造し、数室程度の客室を設けてホテルとしたのであろう。そして、『明治の港区』のいう「西洋料理店」は一階にあったのであろう。一九一〇年三月、鷗外がJollyに招かれたのがこの料理店である。

津田利八郎『最近東京明覧』(博信館、一九〇七年)によれば、当時の宿泊料は一日につき一等七円、二等五円、三等四円であったが、これには食事代が含まれていたらしい。同書は、宿泊客以外の来客につき、朝食七十銭、昼食八十銭、夕食一円といっている(二二九頁)。

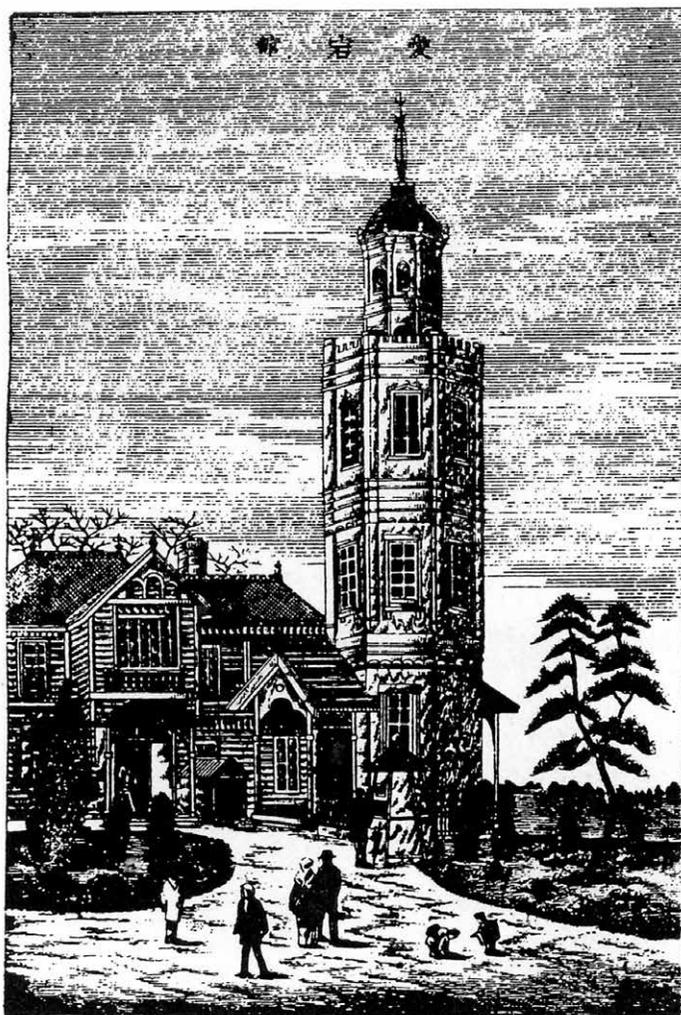
一九一〇年には、ホテル愛宕館は鷗外という通り「東京ホテル」となっていた。『The Japan Directory』の一九〇五年版から、ホテル愛宕館は《Tokio Hotel》となる(同版では七二〇頁)。一九〇四年(明治三十七年)ごろの改称であろう。一九〇二年ごろホテル愛宕館が発足したとき、築地居留地にあった東京ホテルも、日比谷門見付の東京ホテルもすでに閉業していた。後者が営業を停止

した正確な時期は明らかではないが（注5）、いずれにせよホテル愛宕館が創業直後に旧東京ホテルと同じ名を名乗るには後者の廃業から年月がまだ十分に経過していなかったであろう。しかし、『Hotel Atago-kan』では外国人には覚えにくい。そこで、二、三年してから改称に踏み切ったのであろう。

※ ※ ※

ところで、イギリス人の Jolly とはいかなる人物か。鷗外の日記によると、一九〇九年（明治四十二年）九月二十八日、「Indian Medical Service の G.A. Jolly 面会に来ぬ。日本語を善くす。髪なき男なり。」とあり、また十二月三日、借行社で局（陸軍省医務局であろう。）の直轄軍医たちを饗応したが、その場に「印度より来ぬる Jolly」もいたという（注6）。そこで、Jolly は英領インドで軍医として勤務していたことがわかる。

筆者は、『The Japan Weekly Mail』の一九〇九年九月から十二月に刊行された各号につき、『Shipping Intelligence』欄を見た。Jolly がインドから日本に来たとすれば、香港に立ち寄るか、または同地で船を乗り換えるかしたに違い



付図2 「愛宕山公園内愛宕塔之圖」
（注）左の建物が愛宕館、右の建物が愛宕塔。
（出典）東京都編『東京市史稿 市街篇』第78（1987年）、666-7頁。

ない。そこで、とくに香港から横浜に来た船について乗客名簿をていねいに眺めたのであるが、結局 Jolly の名はなかった。イギリスの軍艦に便乗して来日したのであろうか。
次に、彼の離日した日を知ろうと考え、同じ新聞の一九一〇年一月以降の各号を読んだところ、六月十八日付に、同月十四日、ヴァンクーヴァーへ向けて横浜を出帆したイギリス船 *Empress of Japan* に Mr. L. E. Jolly という乗客がいることに気が付いた（六三三頁）。しかし、イニシアルが違うのでこれは別人と思われる。

The Japan Times に、当時は《Guests at the Hotels》の欄があり、東京についてはホテル・メトロポール、オテル・サントラルおよび帝国ホテルの宿泊客が掲げられていた。筆者は一九〇九年十一月二日付から一九一〇年三月一日付までのこの欄を通読したが、Jolly の名は見当らなかつた。

もし彼がホテル・メトロポールなど三軒のホテルとは別の場所に滞在していれば（例えば愛宕山の東京ホテルや半蔵門に近いイギリス大使館内の大使館付武官官邸）、《Guests at the Hotels》欄に彼の名が掲載されていなくても当然である。

筆者は、Jolly はインドで軍医としての勤務を終え、東廻りで本国に戻る途中、日本に立ち寄った、と考える。東京ではじめて鷗外の知遇を得たのであろうか、また日本語はどこで習得したのであろうか。

3 上野精養軒

冒頭で述べたように、鷗外は『追儼』で宴会で出掛ける場所の一つとして精養軒を挙げている。

精養軒主の北村重威しげのりは、築地店のほかに、一八七六年（明治九年）四月十四日、上野公園内にもレストランを開業し、また、一九〇二年（明治三十五年）から一九一七年（大正六年）まで、ここにホテル部門を併設した（注7）。

鷗外は、『追儼』では単に「精養軒」といつているが、これは築地・上野両店をさしていると考えなければならない。実際、彼は一九〇九年（明治四十二年）五月刊の『東亜之光』で『追儼』を世に問うまでに、上野精養軒を数回利用している（注8）。興味あることに、鷗外はこの作品を発表した直後の一九〇九年七

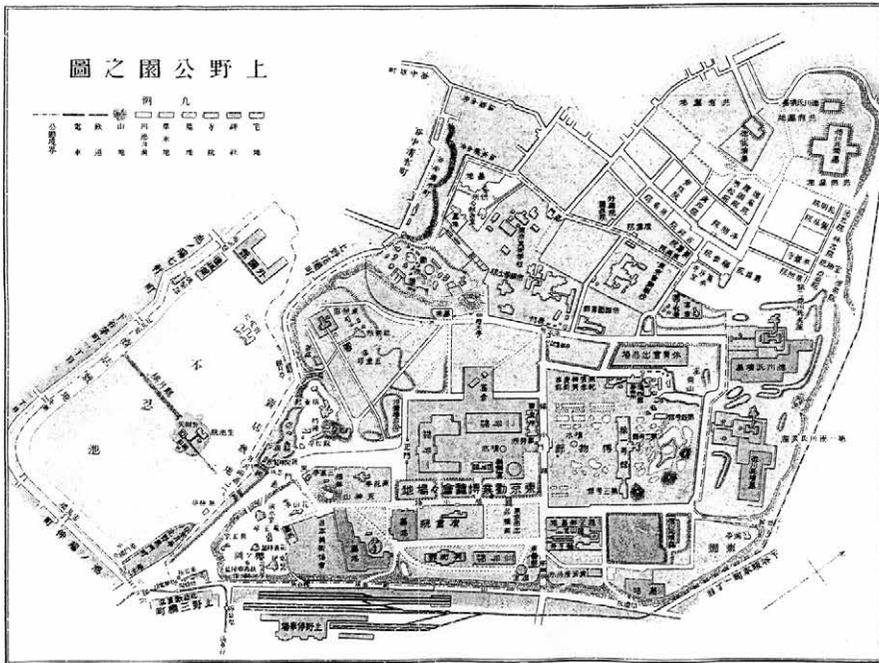
月十四日からはじまって、上野精養軒に足繁く通うようになる。とくに、一九一七年（大正六年）、帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられたあと、頻繁に同店を利用している。一八九二年（明治二十五年）以降、鷗外が住居とした観潮樓は千駄木にあって上野公園からほど近い距離にあったが、帝室博物館はさらに近く、同じ公園内にあった。付図3は東京市役所市史編纂係編『東京案内』、下巻から拝借したが、公園内に帝室博物館も上野精養軒も描かれている（前者は「博物館」、後者は「精養軒」となっている）。

一九一九年（大正八年）九月、帝国美術院（現在の日本芸術院）が開設され、鷗外が初代院長となった。日本芸術院事務局編・刊『日本芸術院史』（一九六三年）は帝国美術院がどこに設置されたかについてふれていない。そこで『上野公園』（東京都公園協会、改訂版一九九四年）の著者・小林安茂氏に照会したところ、緑の情報センター（日比谷公園内）に上野公園にかかわる計一〇二枚の図面が保存されており、そのうち一八七七年（明治十年）の実測図には「文部省所轄用地」が二つ描かれているが、帝室美術院はその一つ（付図2の「三号館」、「美術館」とあるあたり）に置かれたのではないかと思う、ただし確実なことはわからない、との御回答を頂いた。

いずれにせよ、晩年の鷗外にとり上野精養軒は帝室博物館からも、そしておそらく帝国美術院からも近く、非常に便利な存在であったと思われる。

功成り名遂げた鷗外は、その晩年、馬車で、または人力車で、ようやく東京にできた近代的ホテルに頻繁に出掛け、公務のかたわら、または公務の一部として、社交につとめたのである（注9）。

（完）



付図3 「上野公園之圖」
 (出典) 東京市役所市史編纂係編『東京案内』、下巻 (1907年)、432-3頁。

注

注1 基礎となった資料については、全国市長会『市政』、一九八五年八月—十二月号、日本ホテル協会 *Hotel Review* 一九八七年四月、一九八九年二月—四月、一九九二年一月—七月号の拙稿を参照されたい。

注2 クラブ・ホテルは一九九二年、三年ごろ一般向けホテルとなった。付表のホテル・メトロポールがこれである。同ホテルは、一九〇七年(明治四十年)一月、帝国ホテルにいったん合併されたが、二年半のち閉業となった。

注3 José Rizal National Centennial Commission, *The Rizal-Blumentritt Correspondence* (Manila, 1961), pp.164-5. なお "bin ich hier in der spanischen Gesandtschaft umgezogen" は "bin ich hier in die spanische Gesandtschaft umgezogen" とすべきである。The Rizal - Blumentritt *Correspondence* には英訳が添えられているが、"sehr unbehaglich" を "a little uncomfortable" とし、また原文の "unquem" にはアンダーラインがないのに英訳では付されているなど、正確であるとはいえない。リサールは、一八八八年二月二十八日、マニラから横浜に到着し(同年三月三日付 *The Japan Weekly Mail* 二二〇頁)、四月十三日、同地を出帆、米国に向かった(四月十四日付同紙、三五四頁)。

注4 出典は『原田真一編 東京名所圖繪』となっているが、東陽堂の『東京名所圖會』は陸書房版以外の復刻版もあったようである。なお、一八九七年(明治三十年)十月二十五日刊『臨時増刊風俗画報』、第一五一号の『新撰東京名所圖會』、第九編に「芝愛宕山公園之圖」があり、これにも愛宕塔(「五階」の説明がある)および愛宕館が描かれている(二二—二三頁)。また、『東京市史稿 市街篇』、第七八には愛宕館に関する記事があり、また広告が再録されている(六六五、六六七—九頁)。

注5 付表で東京ホテルの閉業を一八九九年三月以前としたのは、同年三月十八日付国民新聞に「旧東京ホテル附近」の表現があるためである（『新聞集成 明治編年史』、第十卷、三七〇頁）。

注6 一九七六年（昭和五十一年）に岩波書店が上梓した『鷗外全集』の第三十五巻は鷗外の日記を蒐めたものであるが、同書の四五五頁、四六四頁を参照されたい。

注7 上野精養軒については筆者はかなり詳細な研究を行ない、*Hotel Review*、一九九三年九月、外国人居留地比較研究グループ（川崎晴朗）、「ヤン・レツルについて」（4）で発表した（六一―二五頁）。

注8 注6で触れた『鷗外全集』第三十五巻によると、一九〇三年（明治三十六年）四月八日、一九〇七年（明治四十年）十月二十五日、一九〇八年（明治四十一年）四月十二日、同七月八日、一九〇九年（明治四十二年）四月十四日など（三七、五六、四〇〇、四〇八、四三七頁）。単に「精養軒」とあり、築地店か上野店か判別できない場合もある（五七、四〇五頁）。

注9 石井研堂『明治事物起原』によると、自動車は明治三十六、七、年、すなわち一九〇三、四年ごろから日本で見られるようになり、一九一一年十月、東京の車台数は一六〇余りであった。このほか皇族、軍、外国大公所所有のものが約二十台あったという（ちくま学術文庫版では第五巻、一四一―二頁）。政府・軍の高官がいつ運転手付の公用車をあてがわれるようになったのか判然としない。鷗外が公用車を使用したことがあったか否か、御教示を願えれば幸いである。

（愛知大学国際問題研究所客員研究員）